

くらやの老

秘鍵の巻

秘 密 鑰	一
法界体性智	五
不思議智	七
不可称智	一二
大乘広智	一九
陀羅尼門	二四
唯識論の八識と四智との転依と自力他力	二六
唯識転依	二九
終局目的	三二
五 智	三三
付録宮下老師の追憶談	一

秘 密 鑰

蒼々無窮なる全宇宙の現象は外面より観するも蒼々として限りなく無数の星宿は暮列し天象の無窮なる、有る人が、世界の文化に隨て天眼鏡等の利器天文学の進化と共に宇宙の益深遠幽玄なるに驚歎すと。ペーコンが哲學はます／＼深く窮むるに隨て有神論ならしむと。全宇宙の内容は物的流行のみにあらずして何か玄理の實在せるありて物的流行の自明なりとは古來の哲學最深の思惟家の思惟せし所。

我佛敎哲學の中に於て、法相家の説に依れば、全宇宙の本質と勢能を兩方面とし、天然の方面は阿頼耶識が萬物の基礎にして現象は是頼耶を離れてあるなし。頼耶は内面は意識にして外面には根身器界の物質と現すれども其根元は頼耶唯心なり。この頼耶及屬性たる識心開展し一轉すれば四智と現じ來る。四智と八識とは一體の變體なりと。此説に由れば頼耶の方面を根底として轉じて智と成ると。

一

二

進んで華嚴に依れば本覺真心不生不滅常住不變の本性を根底とし、此眞理に乖くが故に無明及び迷妄の宇宙と現すと。宇宙の本體を離れて更に眞心あるにあらず本來本覺絶対の眞神永劫存在の理の中に於て衆生は自ら迷ひて生死を感ず。眞理豈に生死わらんや。全宇宙の本體即ち能く自己の迷覺め來つて見れば全く是本覺如來なりと。衆生悉く本來如來、自ら迷てこれを誑らすして凡夫となると。是大乘圓滿の教理なり。彌陀敎に於ては宇宙の本體と現象とに於て之を客體主體の兩方面にし、本來本體の一なりと雖ども、絶対眞心の彌陀の中にありと雖も、現界の衆生は自ら之を誑らす全宇宙の最深の玄理は客體の方面彌陀絶対無限の精神光明にして無始無終の永劫存在なり。

全宇宙の本體定相はいかなる定相なりやは、宇宙本質は甚深不可思議玄妙なるは不可思議不可説なり。

一水四見の如く、唯物的眼裏に映し來る世界觀は物質的流行と現れ、進んで唯心的世界觀には心的流行なるを知る。

佛敎にも華嚴の法界觀には理事觀乃至十佛の境界等甚深にして、眞言の大日の境界等は宗教的表示とし理爾るべしと雖ども、禪門に法身の相を山華開似錦、澗水湛似藍今彌陀宗教的世界觀には二心一元の兩方面あり。天然の世界的方面より見れば人生最惡觀なり。天然の人には精神に苦毒と罪惡の素質あつて、この必然的無明罪惡の皮殼覆深せり。此意識より見れば此世界の皮面のみを見て未だ最深の玄理を發見すること能はざるが故に、世界は苦の舞臺にして厭ふべき穢惡充滿の世界なりとす。

人は天然としては自然の世界的天然生理規定の必然より無明垢質の覆ふことは金玉の鑛に於るが如し。天然の垢質脱却して初て最深の眞質を顯現するが如く、人の精神に天然垢質あり。この垢質は人の本能なり。幸福主義には唯主我幸福を人生の目的とするを以て世界は幸福は少く苦憂甚だ多く、幸福主義の欲望に決して満足を與ふべき世界にあらず。天然の人には脱却せざるべからざる垢質の覆ふあり。この素質が人の

三

精神をして顛倒せしめて、終に眞理に反對の主義を取らしめ、悉く其自己の主義をして目的を達せざらしむ。所謂人は不淨の身質を清淨なりとし、苦憂の中に在て樂を計り、無我を實我と執し、無常に常を求む。この幸福主義に自我執着は決して満足を得べきに非ず。

五智の本質性能は絶待精神及び屬性なるを以て、一切處に周徧せる精神的實在にして、衆生の心理に發現せるものなり。本質は本然にして本自徧在す。たとひ衆生に發現せざるも其本質は常住本然なり。

誤解を防ぐ。

客體の彌陀は超然界に在つて世界的方面の距離に障らず、衆生の身心象は佛智に寫象して其信仰に應じて其に智光を與ふことは、人の師と資との關係の如く、甲の心は乙の人に寫象せらるゝ如き關係に非ず。

佛智は一に絶對無限の遍在にして人の精神機能に發現せる本質なり。楞嚴に、清淨本然にして周徧せる實在が業に循ひ縁に隨つて人の心機に發現するものなりと信す。

法界體性智 絶對精神

自己の精神は絶對精神の本質の個體實現なり

法界とは全宇宙萬法の本體にして或は實體ともいふ。佛教に眞如法性等の數多の名あり。其本質は絶對的精神態にして其量徧時間徧空間遍活動の永劫の自中存在萬物の理にして法として具せざるなし。徳として含包せざるなし。楞嚴經に、如來藏妙眞如性清淨本然にして法界に周徧し、自然に非ず因縁に非ず、業に循ひ縁に隨つて發現すと。法界の本質なる絶對精神は清淨本然なるが故に、造作や因縁より成立したるものに非ず。是萬物の本體なるが故に萬物は此に依り此より生じ此に保持せらる。一切の一大元理なり。絶對精神と云はゞ演繹の如くにはあれども又歸納なり。何を以てか宇宙絶對精神の一元理たるを證するや。絶對精神を證せんには自己は是宇宙の一員なり

この一員たる自己の精神即ち自己あることは何人もゆるす所なり。自己の精神は此身體の宇宙の一員たると同じく絶對精神の一員なり。此自己の實現せるの實體なかるべからず。自己の心象は是絶對本質の個體實現したるに外ならず。

楞嚴に、本體は周徧法界の實在なるも之を實現せんことは業に循ひ縁に隨つて發現すと。其本質にして本然に存在せずして發現すべき理なければなり。また楞嚴に、火大水大も其本質存在せるが故に業に循ひ縁に隨つて發現すと。絶對精神の本質實在せるが故に、一個の心的個體在る時は自己の實現せる如く、宇宙人身を充しめば自己精神宇宙に發現すべし。個人あつて後自己實現の必要によりて後に本質成じたるに非ず本質は清淨本然にして法界に周徧せり。心的個體の縁あるに非れば自己の精神的發現せざるなり。未だ個人自己發現せざるも本質實在せざるに非ず。カントの個人の心靈は本體永恒の實在の時間的實現なりと。身亡び實現滅すとも、本體の滅したるに非ず吾人は信す、自己に實現する如く一切の心機に實現する精神は清淨本然にして因縁に非ず自然に非ず。因縁に非ざるは實體の本然たること、必ず業に循ひ縁に由らざれば發現せざるが故に自然に非ずと。

佛智は法爾本然にして法界に周徧せる實在なり。人の精神によつて發現すること火大性周徧せるも業に循ひ縁に隨つて發現するが如し。

不思議智 大圓鏡智 絶對寫象

大圓とは一切處に徧在せる慧にして即ち絶對寫象なり。此鏡智即ち寫象は法界周徧なるを以て一切個體の色心二現象は即絶對鏡智の發現する所なり。清淨本然なる絶對寫象の本質は法然として本來實在せるも、衆生の心機によらざれば發現せざるなり。

本然に鏡智周徧せるは鏡智は寫象態觀念態なり。交徹靈明にして映發涉入する心理實在なり。空間に感應同交の不思議力あり。例せば幾萬億を距離せる天王星の影は一瞬間に眼に涉入し眼識は却て彼に達す。無邊の空間は念を擧れば忽に涉入するが如く、

絕對寫象清淨本然にして一切處に周徧せることを得。吾人は認識と觀念を以て知ることを得。認識とは間接に觀念的には直接に絕對寫象を推理す。自ら認識し寫象する所なり。吾人は眼を擧れば清虛に羅列せる無数の星宿を視て自ら認識に付する處にして觀念的には無限を寫象し、世界は悉く我が寫象に現し來るは寔に不思議なるにあらずや。楞嚴に色心より外山河虚空大地に泊るまで咸是妙明真心の中の物なりと。此世界現象は眼を開きて見れば認識的にして、眼を閉じて觀念的に觀すれば十方山河大地も清虛も觀念界なり。空間的萬物交徹靈通し、觀念には山河大地も徹照して自己の觀念は洞明徹照するに非ずや。斯の如くに實現し來るは本自本然に大圓智性の本質周徧實在するにあらずして實現すべき理あるなし。

絕對寫象の大圓鏡智は性能吾人が寫象と觀念との實現に歸納によりて絕對寫象の大圓智を證す。然れども個人に實現せるは生理的心理に器械的に寫象せるが故に、絕對と相持と本質と現象との異狀なきやは保しがたし。何れにしても絕對の寫象の性能存せるは否定すべからず。楞嚴に見大識大の本質妙真如性にして周徧せるとは、精神實在せるが故に屬性も實在せるなり。心理的實在なり。

唯識に藏識の見分相分自證分共に藏識の屬性なり。この藏識は絕對精神の迷の方面にして天然寫象の現象、鏡智は本體の方面にして大覺の本體屬性なり。天然の精神を展開して絕對寫象の實質が自己に實現せるものたるを意識し、意象轉じぬれば圓鏡智の分たる個體にして甚深の觀念は悉く大圓智が發現せるものに外ならず。

天然的精神は感覺世界觀を越ゆる能はず。精神越然として一轉せば觀念世界の世界觀の立脚地を轉す。

圓鏡智絕對精神の屬性として本然に法界に周徧せるが業に循ひ縁に隨つて發現す。即ち吾人の精神機能の關係によつて吾人の腦裏に無限の空間も森然たる萬象も若しは認識的に、若しは冥目靜觀に觀念的に實現せるは、是全く本然徧在勢力の自己に發現したるに非ずや。若し宇宙全體をしてこの機能を與へたりしかば、全宇宙に實現する

ならんと云はゞ、人或は云はん、是の如ことは吾等が觀念的に本來是の如くの性能あつて、もとより靜觀冥想には十方の清虛森然たるは完全なる頭腦を有せるものの常にして、何ぞ更に彌陀鏡智の關する所ならん哉と。吾人は之に對して云はん。然らば無限の空間は靈通徹して腦裡に映現せる其勢力は自ら之を造作したるや。しからざらん。是本然にして爾るならん。斯の如きの不思議の勢力の本然たるは其深義は測り得るやと云はゞ、測り得べからずと答へん。自己の精神勢能の然り、勢力は本然に非ずや。是自ら其源理を測り得べからざらん。此不思議の勢能は本然として徧在せるを鏡智となづく。若し全世界の腦を清淨にして明鏡を磨くが如くせば、悉く明かに其機能發現すべし。是不可思議に非ずや。人の寫象にして味然とし藐然として發現せざるも其本質徧在せざるに非ず。

自己の寫象の鏡に發現せる若しは心質若しは物質その質を以て智を認むるなかれ。本質は智に非ず。之を觀照せる勢力を智と云ふ。其勢力が遍在せるなり。

寫象は明鏡の如くにたとふ。其本質勢力は絕對寫象交徹靈明の勢能を不思議智となづく。

若し絕對寫象と自己の寫象に發現せる研究は、哲學カント、ヘーゲル、セルリング等の哲學に就て研究すべし。猶進んで心機精練して實行應用の爲には大圓鏡智に相應せる觀念に凝神し精修熟考專精に勇進し、不倦不撓なる時は心鏡琢磨し萬象森然として明瞭に實現せん。こゝに於て初めて覺らん。大圓鏡智清淨本然に法界に徧在し因縁に非ず、業に循ひ縁に隨つて發現することを。

又不思議智に二義あり。一は交徹靈明十方洞然の實在と勢力なるが故に、不可思議の故に。此智や空間に徧して十方を照し時間に徧して三際に徹通す。不可思議の勢力なるが故に、其玄理や思慮の及び能はざる處、測智の達せざる處、故に不可思議と名づく。

大圓鏡とは、大とは徧法界在無際の義、圓とは圓滿して缺少する處なき、鏡とは譬、

明鏡の萬象を映現するが如く、絶對的寫象なり。交通靈明の勢能なり。

不可稱智 平等性智 絶對理性

絶對精神の性質は人の精神の如く感覺心智力意志等の雜多の性質混淆せるものに非ず。斯の如きの混雜せる心理的素質は、個人的生理規定の肉體保存機能に出でたる素質にして、絶對精神純粹なる理性のみなり。

此理性は實踐理性として人に實現し人格精神の帝王にして小宇宙を主宰する神明なりといはざるべからず。

精神生活の現象界に於て其品格の等級も、此理性の明晰の等差其分量の多少に隨つて自ら品位を定む。動物の心は未だ理性發現せざるが故に下級に位す。

平等性とは絶對理性なり。此理智は清淨本然にして法界に周徧せる實態なり。絶對精神の屬性中最上に位するものなり。理性本然にして徧在せるも其業に循ひ縁に隨つて發現す。完全なる人格の心理機能によつて發現す。たとへば世間の知能も學術によつて啓發する如く、本然理性は間接には客觀界にも直接には主觀的精神界に徧在して實現せる機能は、人の心理なるを以て主觀に直接とす。實體の勢力は法界周徧なるべし。若し全宇宙をして圓滿なる靈的生活ならしめば全宇宙に理性發現すべし。有佛無佛性相常住なれば、たとへ動物と猿人のみの孤島といへども絶對理性の外と云ふべからず。吾人が斯教宣傳の主義は人類をして此理性開展して佛智の實在を信せしむるにあり。佛教の進化説はたとへ動物といへども最高等なる精神生活の階級としての豫備として、決して關係なきものとせず。さればとて進化主義なるをもて、或は精神を退歩せしめ或は動物的生活に延滞せしむる如きは甚だ彈振するものなり。

世界觀は物質流行に非ず。絶對理性最深の徧在世界なり。人類の生活は物的生活、植物動物下等精神生活に止らず、進んで人格最終の中心たる靈能たる理性を圓滿に發展し理性の光明によつてすべての精神及び身口の三業を支配して完全たる精神生活を

遂げしめんためなり。

絶對理性の光明は法界に徧在して了々たり。人の精神の室内にあつて發現す。

平等性とは宇宙最深の蘊奥は純粹理性なり。故に人々自己の心藏を開きて理性發現するに至らば、人々悉く精神蘊奥の極たる理性によつて平等の自性顯はれ、個々に悉く本來彌陀の實子にして四海兄弟の實義あらはれ、是最奥の理性に於て平等一子の系統たるを證す。

最深の理性未だ顯現せざる精神は肉塊の室内に主我を構へ、天然規定に實法を執し、肉體の構造と生理規定の根底に立て我と佗と彼と此とを執するが故に、彼我の見解甚しく憎愛の情熾盛なり。肉に親を認め血に疎をあらそふ。生理規定の下の生活には、共に日光に浴し同じく浩氣をに養はるゝことさへ怪しく謂はざるなり。大にして國疆に我を執し、小にして個人に主我を主張す。是の如きの妄情には平等性智は語るにたらず。

人の精神心平等にして共同一致して一金を千分する其性分量を殊にするも、其性質に同一にして異なるはひとり理性のみならん。智識は經驗によつて量を殊にし感情は生理規定の感情的機能の構造、意志と性格の如き個々特殊にして人々異容ならん。最深なる理性に至つては特殊の感情意象を混せざれば、人々致一する處あらん。故に知る一切生類は理性に於て平等性を現す。平等性は本然周徧の精神發現なり。人類に至つて平等性が外に發現して社會生活人類生活をなすにいたる。動物には理性發現せざるが故に孤立生活なり。人は能く圓滿に理性發展するによつて彼我の感情を脱して社會を照す光となる。

絶對理性は個人の精修によれば個人に顯はれ團體の精修には團體に顯はる。能く此理性の發現せる時代を道德世界とし、發現せざる時代を黑暗時代とす。個人に能實現せる人を道德者とし之に反せるを不道德或は邪惡の人と爲す。

此絶對理性は倫理學の本尊にして之を個人の精神に發現して、良心の光となりて自

己の精神一切の意志の行爲を支配す。倫理最終の目的は此理性を個人の意志に開展せしめ至善の圓滿に到達せしむるにあり。

人は此の理性完全に發展してすべての行爲を支配して理性に相戻らざる精神態をば聖人或は靈格と稱すべし。個人のみならず一切の人類をして悉く理性的靈的生活に同化するべき資格を有するものを應身即ち人佛と號す。即ち絶對理性を人格に圓滿に實現したるのみならず、人類に實現せるものなり。佛教によりて解脫靈化せられたるものはこれなり。諸佛出世の目的は一切の人類をして此理を實現せしめて終局目的に眞理に到達せしめんが爲のみ。

一切の人的精神素質脱却して純粹なる理性的團體を淨土とす。平等性智を具體的に發現したるものなり。

彌陀の絶對理性一切處に徧在せり。衆生いかゞして自己の精神及び一如の社會に發現せしめんと欲するや。専ら神聖なる、正義なる、理性の本質性能たる彌陀を祈念し精修熟練すれば業に循つて發現す。其眞理を聞き倫理の主なる理性修養することに注意し不倦なれば、個人に發現し、自己に實現を以て其の隣に及ぼし其反映を以て佗を照す。是經に斯光に遇ふものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜湧躍して善心生ずとは是の義なり。

徧在なる理性の火はソクラテースの腦理に發現しては廣く社會の人類の頭腦に傳はりて、甲の燈火より展轉して廣く闇夜を照す如く、或は釋迦の日光と發現しキリストの月球に現して、團體に流行、人々其性能具有せざるはなし。何ぞ自ら發現すべき能力なくば、客觀的流行の教火によつて自己の精理性に轉せざるや。

人あり、自己に理性あり良心あることを疑はず、然れども彌陀の絶對理性平等智の勢力周徧せるを信せずと。答へて、經に 如來是法界身、入一切衆生心想中と。然らば自己の精神に實現する其本質何れより來りしや。絶對本質自己機能發現に非ずや。汝は絶對外の精神的な人ならんか。理性に彼我あらんや。汝が精神に發現する理

性は垂迹にして絶對理性は本地なり。本地實在せざるに垂迹權化のみあるなければなり。

ソクラテース、孔子とは絶對理性の權化にして最たるものなり。

釋尊は四智圓かに具り、キリストは察智の垂迹なり。アリストートル、プラトン、カント等は鏡智の應身にして、ワット、厩戸皇子及政治家、文章家、武家等は作智の化身なり。絶對の五智法界に周徧し、業に隨ふ、其業に精修熟練し、縁に隨ふ、教師及び之を資助すべき縁によつて發現す。何ぞ勤めて實現を求めざる。

釋迦、キリスト、ソクラテース、孔子等の聖哲偉人の精神の本地は清淨本然にして法界に周徧する彌陀の智なり。因縁に非ず、自然に非ず、其本質は因縁より成立せしものに非ず、本有なり。自然に非ず、精修行の業によらずして發現すべきものに非ざればなり。

ソクラテース、カント等はこの智を以て絶對獨尊とし神は之なりと。彼らは圓滿に眞理を認むる能はず。この方面のみを獨尊とす。彼等が自己の性格に實現したる歸納よりの推論なり。

鏡智と性智との性質性能は論理倫理の哲學によりても説明することを得べきも本より精神を之に投ずる如きは哲學の範圍に非ず。

次に觀智に至つては、深く神の内容に入つて深秘的關係より佛知見を興へられて神の内容を知見し致一する妙機なれば獨り宗教のみあつて之に關す。

大乘廣智 妙觀察智 甚深内容 秘密鍵

客體としては大乘廣智法界周徧の内容に人の精神を開展し、轉入して佛の妙境に運載する妙智にして、此周徧内容との關係によつて佛知見を開發し、甚深微密の妙境に入つて心機能致一す。此智や佛甚深の秘奥を示す。神の内容を顯示す。玄妙不可思議の内容を觀察し、三昧に入て心機能に致一し不可思議境を觀察す。

妙觀智は法界に周徧して甚深の秘藏を開示せんとする性能實在せるも、衆人専心精修熟練するに非ざれば發現するものに非ず。

甚深秘密の法藏は甚深の觀念三摩耶の妙論に非ざれば、是を開展して甚深秘奥を知見する能はず。

彌陀身心遍法界映現衆生心想中。本來彌陀清淨眞法身眞心清淨本然にして法界に周徧して實在せざる所なく、自然に非ず、因縁に非ず、業に循ひ縁に隨つて發現す。甚深の法身及び事理の莊嚴は鏡智性智の如く寫象及び理性にあらず。深く冥想觀念の深秘の内面に實現せるを以て、三昧に入つて心機能的致一に實在なるを以て、佛知見開示として知見すべきものなるを以て、三昧に凝神し心機開展するに非ざれば知見發現するなし。

不可思議的實在として發現する機能は自己の主觀的にして主觀内の客體として實現するものなれば、主觀々念法界に周徧するが故に、所現の客體も又法界に周徧す。其實現せる客體の表彰其象無邊なり。事理空假中等其形式多容なりと雖ども三種に攝すべし。感覺的と寫象的と理想的となり。

心機開展の先發として顯現し來るものは感覺的に明相なり。其象相は導師觀經の疏に擧ぐるが如し。即ち明相現あり。或は錢の大的如し又鏡の如しとし、或は花を見、或は瑠璃寶地等の種々の妙相を現す。其相觀經の如し。

淨土の依報莊嚴、面貌端正にして無比なるを現じ、大は全身虚空に滿遍し、或は丈六八尺等。本自清淨法身法界に周徧する、念に隨つて映現す。一切處にして法身ならざるなし。法身無相なるが故に無相は相として相ならざるはなし。故に實現す。其本質一切に徧在せる故に。

寫象的啓示とは觀經眞身觀に、佛の相好光明を觀する時、佛無盡の慈悲を以て念佛の衆生を攝取すと。導師釋して、衆生身に敬禮すれば佛是を見たまふ。口に稱すれば佛是を聞きたまふ。意に念すれば佛之を知りたまふ。彼此の三業相捨離せずと。次に

佛身を觀するを以て佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。

聖阿闍梨曰く、觀佛の人は佛身を觀じ已つて而して後に佛心を見る。幸哉我等大師の自解佛願の恩力に依つて佛身を觀せずして正しく佛心を見る。其佛心は無取捨の上に攝取不捨したまふ。是を以て無縁慈攝諸衆生なり。觀佛の行人には佛影現行者心中、念佛の衆生は恭くも佛心の内に居住す。

本來周徧なれば超感覺の感覺の發現するも全法界を佛心とするも、其本質本然にして念に隨て現するなり。全法界佛心なりと觀するも念すれば實現なり。こゝに注意すべきは鏡智の發現としての寫象と啓示の寫象との分別なり。鏡智には觀念的に普遍的に又認識と相應せる觀念なり。寫象啓示とは已に佛知見開發したる感覺的に相好現じたる上に、佛心は神聖正義慈悲なりとの自己の内容を反映し客體化して、之を佛心の啓示とするものにして、鏡智は觀念的にして、此は三昧にして、唯識の所謂定中意識なり。鏡智は定を要せず、これは冥想定中なり。

次に理想的法身觀

寫象的に佛心を觀じ已つて、次は佛の本體即ち清淨眞法身を觀すべし。法身は寫象の如くに抽象に非ず。絶對の眞心にして最も清淨なる絶對精神能なり。最清淨なる概念の體、定中所現の最清淨なる絶對觀念能なり。是最深なる本體にして是を清淨法身と名づく。法身は無相にして此本體より感覺的相好光明等の體なり。喩へば清淨法身は鏡體の如く、相好莊嚴は影像の如し、故に相好莊嚴を觀じ已つて其感覺を除きて全體を觀れば即ち法身理想觀なり。

又空假中の三觀あり。空觀とは理想的空觀にして、若しは色質若くは心質一法をも立てず、純粹なる空觀的無想念的觀念的なり。次に假觀とは依正二報莊嚴すべての色心二質の心理現象なり。中觀とは兩面を統一し無象の心體即ち現象にして、空と假とは一體の兩本面にして、一方を捨て一方を取るは偏にして圓に非ず。双方双照して統

一するは中觀なり。

陀羅尼門

觀智の心理に發現するものあり。陀羅尼門といふ。其の種類甚だ多し。一切の一切の腦中に印燒せるもの記して忘失せず。一切の惡は記して作さず。一切の善法は持して作爲すとの類。或は文句義法等に於て摠持して遺失せず。是他三昧的精練によつて精神の宮殿たる腦等の智機に最とも精練熟達せしめたる功果による。腦漿を湛然澄清ならしめ妄想の波浪を起さず。三昧はよくこの功をなす。

神通も三昧に最清淨に澄湛せる精神と交徹靈明の勢能作用の感應作用ならん乎。未だ經驗せず、推論のみ。此部類に關する觀定工夫等の實現甚だ多し。

一切大乘經は此三昧門により啓示せる現象を彰て發表として説明したるものなり。未だ此門に通入せざる徒大乘の教觀を批判するもの盲人色を説くが如し。

宗教の奥室に入るは此門に依らざるべからず。宗教的宇宙の最深の玄義は三昧の寶鑰を以て開顯すべし。絶對精神の中心點を認めんと欲せば佛知見を開發すべし。法身如來藏を開きて無量光壽を發見するはこの三昧秘鍵を以てす。一切處として彌陀ならざるなし。淨土ならざるなし。三昧の業を以て發現すべし。

無量光壽法界に充滿し處として蓮華藏ならざるなし。本然清淨業に循ひ發現す。緣に隨て實現す。

絶對真理の靈界の王宮には三昧門より入る。法界周遍の淨土を發現す。

二四

唯識論の八識と四智との轉依と自力他力

唯識論には世界的天然生精神世界的方面を藏識の所現とし、天然の精神には迷的素質あり、偏計所執の謬誤性、實我を執する謬性と、天然規定の依他起性、天則は自然にありて此天然の規定なる法を實法と執す。元來天然規定には之を開展して眞理に進化すべき規定あるをせしらず、天然規定の物質的四大、心質の受想行識等のすべての物心二質の天則は眞理なりと執するを實法を執すと云ふ。八識の迷的天然的精神は此實我實法の見地を超えて其上の原理を發見すること能はざるなり。理想の立脚地にして此方面に立て主我執と天則の世界因果の規定によれば因果律は信すべし。主我幸福の主義なるを以て幸福に感ずる。罪惡と善福とは實に感じて實我を執し實法を執するが故に善惡禍福の因果には實を執し、この實我實法主義の立脚地に有て罪福を信じて善本を修するは天然的生活のみにして眞理盡たりといはゞこれまた然らん。然れども此天然は之を開展して最深の眞理に進化すべき性能なるを以て、天然の立脚地を轉じて眞理進化の方面に進化するに非ざればならず。天然の方面は偏計所執性と依他起性とにしてこの主我を自力と云ふ。

實我實法の見地を超越するには一切唯識觀に入る。萬法は末にして其原に歸すれば唯識の一元なりと其一元に入て唯心に體達せば從來の意象一轉して賴耶は鏡智と末那は性智と意識は觀智と現識は作智と轉化する。

主我と天然規定を超越して最深の根底と中心に中心を求めば實に主我あるなく自我も及び全宇宙の萬有も悉く一元の絶對眞心即ち彌陀のみ眞理なるを知る。こゝに於て圓成實性顯はれ來る。この實性のみ眞理なり。自己の精神も深く觀達すれば圓成實性の暫らく發現したるものなりとする。圓成實性の本體にして本然に遍在するに非ざればいかゞして自己の精神の源底に實現しうるものならん。圓成實性は一元理體にして一切の色心萬法を具有して一も缺ぐことなし。若し圓成實性の實體本有にあらずして

二六

二五

二七

宇宙の現象何にして發表實現したるものならん。圓實性は即ち彌陀の本體にして體に屬して無限の眞理性能を五智とはなづく。

此佛智を信するものは主我と天然の世界とを最終の中心とせずして、絶對眞理なる彌陀の本體を中心として是に歸命信順するが故に、精神轉じて彌陀の生命に靈化するなり。

主我と天然規定因果律の立脚地——自力——主我——自己中心——小我——妄

彌陀、絶對眞中心——自力——絶對中心——大我——眞

一體異方面
八識の方 中底 自力
四智の方 中心 自力

偏計執依佗起性中心 自力

圓成實性中心 佗力

楞嚴經に依て自力佗力を判せば

妄想分別影像主我及世界顛倒の立脚地 自力

如來藏妙眞如性大圓覺妙明眞中心 自力

禪によれば

無 無キモノヲ有ト執スルガ迷 自力

無漏智性本足具本來是佛 自力

唯識轉依

藏識根底を轉じて四智を所依とす

偏計依佗起性の見地を轉じて圓成實性に依す

轉依とは從來の天然の精神其もの、本質を轉じて買ふに非ず。人は天然には開展すべき性能なるが故に、天然の主我即ち小我は是絶對眞我の一分が實現したるものなれば、眞我の中の我にしてその本體を外にして特殊に小我あるものに非ず。物質の此身質も十四元素の大元素より借りたるものにして大元素を離れ自己の元素とて有るものに非ずと識る如く、從來の天然に實に我あり實に法あり、即ち天然規定ありて是轉化すべからずと認むるを誤とす。從來の天然意象を開展して絶對眞理に依るところの意志を轉依と云ふ。自己の中心を轉じたるなり。曾つて主我にして天然の世界依屬の意志を轉じて絶對なる眞神に依屬し、これを中心とし最終の目的とするにいたる意象を云ふ。

全宇宙の本質は絶對精神にして、自己の本體たるなり。

個人的生理器械的發現せるを以て絶對の本體を疑はざると俱に、器械的發現は生理規定の關係あるを以て、個體實現の意識的生理的實在とこの個體意識と本體とは全然同一とは云ふべからず。個人的生理的に墮落せば生理異質の爲め混せらるゝを免れざればなり。自己の精神は絶對精神の本質の個體生理的心理の現象なり。絶對精神の定相は個體と生理素質上との混沌を除きたる純粹なる虚徹靈明なる精神態と爲る。

已に絶對眞心の靈明純粹なる精神態と定りぬ。其量は絶對なるを以て無限なり。空間的には横に十方に徧して餘なく、時間的には三際に徹して遺るなく、處として實にせざるなく、時として在らざるなく無限量なり。

一切の萬徳を具備して萬法を包含して遺すことなく、十方三世一切の依正色心事理として具せざるなく、即ち十法界の四聖六凡迷悟善惡の心性淨穢の色象を顯現す。全法界の色心の萬象は此本質の現象なり。

現象には染穢善惡の身迷悟の心象無量無邊の差別あるも本質は不變なり。染穢善惡

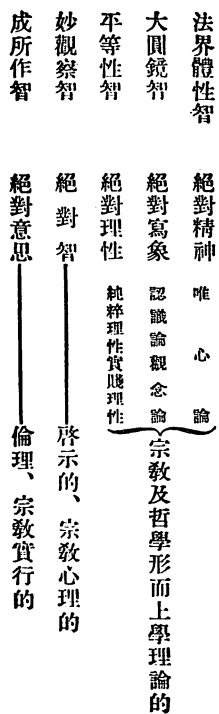
等現象には可厭可惡の現象も本體具徳の圓滿を彰すに足りぬ。其が爲に本質は染汚缺損せざればなり。

三二

終局目的

絶對真心の個體心、目的に個體は天然現象に現して天然因果規定の下に個人を目的を立てるも、深く個人の根底なる絶對真心玄理の終局目的の理あるを識り、是に協力して最終の歸着を定むるは是真理の目的なり。此絶對真理の目的自然に有するをしらずして個體の根底及び真理の終局をしらざるを迷惑と名づけ、此理を覺りて真理の目的に歸順するを最終真理の目的とす。彌陀佛智の妙用こゝに在り。人は天然現象のみを見て宇宙最終の玄理を識らず。佛智の妙力に協力せば無上涅槃の目的に至らん。佛智は此理を照すにあり。

五 智



辨榮上人の法兄宮下老師の追憶談

潮 高 宗 故

横濱光明寺宮下上人は辨榮上人より十一歳御年上の御方で居られたので本年八十一歳の御老體なれど壯者を凌ぐ御元氣で居らせられる。辨榮上人東漸寺に入室遊ばされた當時既に法兄の地位に居られた爾後同師とともに御修行遊ばさること多年にして、或時は五香教會所(今の善光寺)に川服布教され暫く寺務を執つて居られた事もあり、又御師辨榮上人の御意志を受けて、教會所を改め寺格を得んとして盡力なされた御方でありました。斯の如く辨榮上人と宮下上人とは最も親しい間柄であられたのであります。此の御方について承つたものを以下に記します。

辨榮上人は安政六年(戊午)二月二十日千葉縣東葛飾郡手賀村大字鷺野谷三三〇番ノ二山崎家に御生れになりました。元來山崎家は檀林東漸寺の末寺醫王寺を其の菩提所として念佛宗であつたが御父上嘉平氏も尙ほ熱心な稱名念佛の信者であつた。當時念佛嘉平として其名が知られて居つた程でありました。御母上は佛教の信者で慈愛ふかい御方であつた。上人幼名は啓之助、慶應三年の頃鷺野谷私塾に入りて習字經書を習

三三

はれた。天性叡悟幼少より文學經書に秀で非凡な精力を藏せられた。薪を負ひ馬を牽きながら、田畑に勞する時と雖も暫時の間も聖賢の書を手より離すことはなかつた。かくして上人御年十五六にして當時世間普通の書は皆讀破されたのであります。上人僅か十二歳の時である、彌陀三尊の瑞想を空中に想見して憧憬措ず暇毎に寺院の説教講話を開法して鍛心練慮座をたつ邊なかつたのであります。釋尊の傳記を一覽する毎に出離の念いよゝ深く、遂に兩親にその宿志を述べられた。折柄御父上は亦家業の餘暇勅修御傳等を讀み専ら念佛一行を修する程の人であつたから、其時凡僧となつていけない、眞の出家となつて貰ひたい、それには修行に堪え得る忍耐がなくてはならぬとて、其日から毎日大人一人前の仕事を課せられた。上人は喜んで其の任に堪えたれば出家の希望を容れて菩提所醫王寺山崎德榮和尚に話された。和尚直ちに承諾あつて入室することゝなつた。時に明治十年の頃であつた。山崎德榮和尚は當時東漸寺の納所として毎日出勤して居られた。上人こゝに於て初めて佛教の經典を習はれた。毎日師の歸りを待ちては不審とする點をば質問されるのであつた。和尚は遂ひに自分は魯鈍淺才で師範の任に堪えぬとて本寺靜譽大康上人に教育を依頼された。蓋し大康上人は漢籍に通じ、且ては上野東叡山の惠澄律師に就いて天台學の蘊奥を極められた碩學であつたからであります。早速つれて參れとの仰せで啓之助は大康上人に學ぶことゝなつたのであります。此處に於て四書五經の講義を聽き華嚴經を授けられた。其の後德榮和尚は啓之助の剃髮授戒の師たらんことを大康上人に懇望した、早速承諾あつて大康上人を釋王寺に招し、剃髮の式並に授戒の作法を嚴修し、名を辨榮と改められた。時に辨榮上人御年二十一歳であつた。

出家の本意を遂げられて後は廣く宗乘餘乘の典籍に涉られ殊に天台の三大部を研究される等此處に二箇年餘を過ぎた。此間雜務の時と雖も書籍を離したることなく、夜は行燈の下に勉強し、朝は四時に起床、烹炊までも一身に引き受け寺務から雜務に及ぶまで喜んで從事された。毎夜の睡眠は僅か二時間位しかとられたかつた。皆その篤學なるに稱歎しないものはなかつた。又雜務の餘暇には黃蘗版の一切經を研究され三箇年にして讀破された。慧解天然にして眼光紙背に徹すると言ふ有様で其の熱心なる研究は華嚴、阿含、般若、法華等各部の要義を多く暗じて、其の教理教義を深く悟り上人の法話の中にその哲理の深淵なる實に計り知ること出来なかつた。斯くして上人は常人の遠く及ばない叡聖を具しておられたのは實に宿因の力強い方であつたと言はねばならない。當時小金の教會から新しい意見を以つて居る牧師が折々東漸寺に尋ねて種々の難問をもちかけた、師の上人は答ふるに隨分苦辛して居られたやうであつた。今度その弟子辨榮上人が師に代つて答ひるやうになつてから却て此方から世界創造説や人生論について問ひかけるので牧師は遂ひに答辨に窮し、其後どうしたことが東漸寺に來なくなつたことがある。明治十五年一月教養の師の勧めにより芝増上寺に於て大谷良胤上人の往生論註の講義を聽かれた。其のほか俱舍論や唯識論述記を聽講された又田端興樂寺に於て密教を研究され、淺草の時宗日輪寺貫主山實辨師につきて華嚴五教章講義を聽かれた。上人是等の講義を聽き東漸寺に歸山されて曰く、諸師の講義と雖も年來獨學自解による考へ以上に出るもの殆どなかつた。上人は又東都遊學中佛畫等を畫き廣く佛縁を結ばれ、上人に接するものは皆その御徳を慕ひ法を求めたそれ故東京に多く信徒があつた。又五香の教會に度々留錫ありて多くの信者を導かれた。明治十五年秋小金に歸り師の允許を得て埼玉縣南埼玉郡三輪野江村飯島宗圓寺へ隱栖して、専ら一切經を閲覽し佛畫を修し只管稱名の行怠りなかつた。明治十七年五月二日師靜譽上人俄然腦卒中に罹り遷化せられたので、直ちに東漸寺に歸りて師恩報謝の爲め爾後百箇日常座不臥晝夜専ら念佛の行を修せられ、食事、便用の外は座を設けてたゝれなかつた。此の精進なるを聞き傳へて遠近の道俗は實に希有の思ひをなしたのであつた。上人此の百箇日の間には種々な尊い感見があらせられたやうである。或年秋九月常陸筑波山に登り、岩窟に籠り百日の豫定で至心念佛苦修練行せられた、此折果滿覺王獨了々の三昧發得し玉ふた。而して警察の干渉ありて二週日にし

て下山された。そして再び宗圓寺に立歸り一切經を披閱すること一箇年有餘にして、後東漸寺に於て多數以徒の爲め淨土三部經、選擇集、梵網經等を講演された。其後關東各地を巡回布教傳導にお忙しい程であつた。此頃上人印度佛跡參拜の念をおこされそれより法話の上などにて御意志を話された。日頃法潤に浴する有志の淨財集り、又東京淨土宗務所の厚意を得られて、渡天準備をなされた。集る淨財は上人行き先の地に預け玉ふことゝして失ふおそれありとして、法類等の相談の結果、渡天事務所を淺草誓願寺山内徳壽院におくこととなつた。集まるもの三千四、五百圓であつた。準備も整へ、明治二十七年十二月佛國汽船サラジ一號にて印度に向け出發なされた。上人は渡天三箇年位の御豫定であつたが印度にありて變更され一箇年にして歸朝なされた。釋尊成道菩提樹下の土を三升程御もち歸りなつた。その土に京都の土を混じて一萬體の佛像を自ら作り玉ふて是を渡天淨財寄附者等に施し玉ふた。其後諸方を化益して伊勢、京都、廣島等各地に巡錫して佛像を畫き多くの信徒を濟度された。

又辨榮上人は書畫に妙技を得ておられたので、大字、細字をよくせられた、法華經文にて三聖立像を畫き、淨土三部經文にて三尊來迎佛等を畫かれた。又胡麻粒半面に不動明王を中央にして、其の兩側に矜羯羅、制多迦の二童子の三體立像を畫き、或は三十六道場を畫かれた。米粒の片側に六字名號や和歌等を畫かれた、天照皇大神宮等の文字を口にて右から左に、或は左から右に圓形に畫かれた。淺草誓願寺に御出の頃は南無阿彌陀佛の六字を信者の方に向け倒さ書きして之を施與し結縁なされた。上人は常に念佛の一行をおすゝめになり、選擇本願の趣きを明かになされた。斯くて衆生濟度の爲め尊い御一生を送り玉ふて御年六十三歳にして大正九年十二月四日御巡錫先き柏崎極樂寺に於て遷化遊されたのであります。

昭和三年四月廿八日印刷
同 三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人 小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番